

續洋畫問答

マ
墨田清輝君談

乙羽子一日黒田畫伯をその邸に訪ひ、閑話半日、精しく君が洋畫に對する考を述べられしを聞いた、乃ちこの談話はモデル論から始められたのである。

(問) それからモデルを學校で呼ぶ時の様子はどうです、

(答) それは一週間毎に更へるものだから大抵先づ月曜日の朝學校にモデル業の奴が大勢集まつて來るそれを一々見て極める、見るのには男でも女でもすつぱだかに爲つて、臺の上に登ると、それを生徒中が集つて見て雇ふとか雇はぬとか極める、不合格の奴は裸に爲り損で、其儘歸り合格に極まつた奴は生徒が定めた形で頭の上に手を擧げ立つて居るとかなんとか、其形を一週間の間は守つて居る、さう云ふと大變苦しいやうですけれども慣れたら苦しくない、又時間の上から云ても、朝八時から十二時迄續けてやるのではない、一時間の中十五分だけは必ず休む、八時からキツかり始めもしないが、マア八時から始めたとすれば八時から九時迄やつて九時から十五分休む、九時十五分から十時迄やつて十五分休む、さう云ふやうに十五分宛休む、其間は話をして煙章を^の吃んだり色々なことをして居る、女のお轉婆な奴などは稽古の時間中で手本の形をして居ながら色々な人情話などをして人を笑はせるそれを聴きながらかくのは面白いです。

(問) 人間のモデルばかりで動物のモデルはどうしますか、

(答) 動物のモデルは學校ではやらない、何ぜかと云ふと學校では腕をこしらへるのが第一で、畫は學校以外で、來る獸類などは専門になつてからやつて丁度宜い、學校に一番適して居るのは何と云つても矢張人間の手本ばかりです、それだから學校らしい學校では何處でも人間の手本を使ふのです、人間の上に就てする説明が一番分り易い、木や猫や牛を書いて、それに就て即ち硬いとか軟らかとか、又乾いて居るとか、瘦せて居るとか云ふやうなことを言つて見ると丸で其物の形や質の説明のやうでかき方の説明としては甚だ分りが遠い、さうして木何かと云ふものは枝などが少し計上に行かうが下に行かうが一寸知れない、それだからついでにかげんと云事に爲りやすい、人間の手本ではそうは行かぬ首が一分なり五厘なり、軀の中心から右か左にはづれる日には大變だ、そう云もので目を確かにして來れば宜い、一番人間に就て説明するのが分り易い、それで分らない奴は分らない奴で仕方がない、

(問) 人間の満足に書けない奴はどうするです、

(答) 一と通りまで人間の形の出来ない奴は何に爲つても仕方がない先づくづです、只景色など云ふものは一寸胡魔化しの利き易いもんですから、景色でなりとも名を爲さうとする人も有る様です、併し景色などをやる人は皆人間のかけない人だと極める事は決して出来ない、好でやるのと無據やるのとは區別しなければならぬ、景色畫かきの^コロなど人物も名人です、

(問) それはそれでせう、我々が寫眞を寫すに就ても最も寫し易いのは景色、人間の方は光線の工合が始終どうも六ヶ敷いです、寫眞でも人間は進歩しなければ寫せない、悪く行けば^{ばけもの}化物が出来る、景色の化物は決してない、詰り空氣の工合、陰晴の工合でも色々に変はる、それですから人間はさう云ふ風に化け易くなる、矢張り繪

何かもさう云ふものでせう、

(答) さうです人間の形が書いて満足まんぞくに往つてなければ是は化物だ、化物にも通用はしにくい、人間の形の満足に書いてない程心地の悪るいことはない、人間の繪が出来てまずく出来上つて居る程心地悪るく感じることはない、景色何かは悪るく出来上つても見られぬ程心地が非常に悪るいと云ふことはない、まずいと思ふ丈のことで、人間のまずくこねてあるのはたまらぬ、

(問) それで油繪ですなへ、油繪にも時代と云ふものがあるだらうと思ふですが、どの位の時代を経て此位になつて来たのですか、

(答) 影日かげひなたの付いた畫の始まりは随分古いです、希臘の末代即ちポンペイなどの畫はもう影日かげひなたがついて居ます、併し油畫と云奴はずうと後に出来た、そうして十五世紀の末頃から十六世紀にかけて立派な油繪が澤山出来ました、

(問) 日本で言へば奈良朝時代と云ふ趣があるですね、

(答) そうです其十五世紀十六世紀と云ふ處が伊太利美術の一番いゝ時代です、先づレオナルド、ド、ヴァンシイが千四百五十二年に生れ、ミケルアンジュが千四百七十五年、それから例の名高いラファエルが千四百八十三年に生れたので此の三人が重に盛な仕事をしたのです、こう云立派な畫かきが澤山出来たのはつまり時代がさう云ふ人物の出来るやうになつて来た、半分未開で物事を考へるには先づ形が目の先きに出て来る、そうだと云て全くの野蠻で無いから目の先きに出て来る形は優美な形だ、宗旨家でもさう云調子で野蠻時代の形有る神と今日の

形、の、無、い、神、と、が、先、づ、云、は、半、分、半、分、で、有、つ、た、政、治、家、の、方、の、側、で、も、其、通、で、新、規、の、社、會、が、こ、れ、か、ら、出、來、や、う、と、云、處、
 だ、か、ら、面、白、い、今、日、の、目、で、見、れ、ば、其、時、代、の、有、力、家、な、ど、の、志、た、事、は、新、聞、の、種、な、ど、に、は、持、つ、て、來、い、の、事、計、で、す、が、兎、に、
 角、立、派、な、家、を、建、て、そ、れ、を、立、派、に、飾、と、云、事、な、ど、は、去、き、り、に、や、つ、た、羅、馬、法、王、の、ジ、ユ、ル、第、二、世、や、又、レ、オ、ン、第、十、世、な、
 ど、非、常、に、美、術、家、を、た、す、け、て、仕、事、を、さ、し、た、の、で、す、

(問) ラバエルの畫の寫眞を見ますと佛畫跡のものが多うございますが、戰爭の畫でも宗教上に起つた戰爭と云ふものが書いてあるですか、

(答) あ、の、時、代、に、は、ラ、フ、ア、エ、ル、に、限、ら、ず、重、に、宗、教、に、緣、の、有、る、畫、を、澤、山、か、い、た、の、は、日、本、で、彫、刻、師、は、佛、師、だ、と、云、ふ、
 様、な、も、ん、で、ラ、フ、ア、エ、ル、な、ど、も、つ、ま、り、耶、蘇、や、マ、ド、ヌ、の、像、を、か、く、の、が、本、職、で、有、つ、た、お、ま、け、に、法、王、の、勳、負、に、な、つ、て、か、
 い、た、の、だ、か、ら、耶、蘇、教、に、關、係、の、有、る、畫、が、多、い、だ、け、れ、ど、も、今、お、話、し、た、通、り、其、頃、は、今、日、の、様、に、氣、取、つ、た、時、代、で、な、か、つ、
 た、か、ら、形、や、色、が、立、派、で、建、物、に、甘、く、は、ま、る、物、な、ら、何、ん、で、も、か、い、た、の、で、す、女、や、男、の、裸、の、多、い、の、も、其、線、の、具、合、や、何、
 か、が、至、極、粧、飾、に、適、し、て、居、る、か、ら、で、す、

(問) 残つて居るものは何でせうか、宗教の寺があつたから残つて居つたのですか、

(答) 詰りそうです、其時代の畫と云ふものは今日とは違ひ大抵建築物の飾だつたのです、立派な寺などが出來たお蔭で畫も出來たのです、今我々がやつて居る様に小さな三尺や四尺位のをかいて壁にぶら下げ、友達同志で見ているとか悪いとか云つてそれでお仕舞と云ふ様な事ぢやなかつたのです、

(問) 日本なんかと一轍なんですね、

(答) さう、同じことで、どうしても世間で以てワイ／＼騒ぐものが發達する、世間で以て捨てられた日にはどうしても發達しない事は極つて、

(問) して見ると今宗教的の繪が少なくなつたのはどう云ふ譯ですか、

(答) それはチヨツト考へても分る、御互に知つて居る者の中で何かの宗旨を信仰して居る奴は殆んどない、それ丈けでも分る、今日出来る宗教畫と云ふものは宗教の考があつて書くのではない、一寸云はゞ士族の商法で頭に無い仕事をするのですから、筈が無い、畫と云ふものは色や形が第一だと云ふ事を忘れ畫で理屈を云はうと云ひ理屈づめの世の中では宗教の畫は尤もだめだ、理屈と信仰とは敵だし始末に行かない、キリストの像でもシヤカ、の面でも今出来る奴は有難くない、耶穌が黒んぼうであつたから黒んぼの耶穌を書く、益々有難くない、白んぼだらうが黒んぼだらうが唯有難い我々を救つて呉れる人の繪を書くのだから、成るべく有難いやうに書く、それに、ついちや形も、成る可く完全にやる色合も出来る丈釣合のいゝ目にやはらかな様にやれば、或は拜でもいゝものが出来るかも知れないが、今畫伯と稱て居る連中がこしらへる宗教畫は只自分の力を見せる積でかくのであるから、いやに氣取つたものしきや出来ない、今の人の頭でいゝ宗教畫をこしらへ様と云ふのは無理です、時勢に適しない、今の時勢は論より證據で無くつて證據より論で頭がせせこましいのですからだめです、

(問) 今の油繪ですが、昔から見るといくらか進歩する方の側に向つて居るでせう、

(答) さうです子、今の開け方と昔の開け方は違つて居る、進歩して居ると云ふことは言はれないだらうと思ふ、併し別に退歩して居ると云ふ譯でもない、開け方が違つて來て居る、詰り日本繪と西洋繪と較べてどつちが全

美術だらうと云ふ様なもので、どつちも美術で、どつちも各々長所が有るのです、又昔のものも宜いものがあるし今日書く繪でもさう悪るいとは限らぬ、併し今日書くものと昔し書いたものとは頭の使ひ所が違ふ、西洋繪で云へば線などのことはレオナアールの様に優美なミケルアンジュの様に嚴確な又ラファエルの様な素直な線をかいてのけたのは又とは世に有りません、前にも云た通り其時代では畫は建築の附屬でしたから人物の配置等總てうつりのいゝ様にやつたのです、今寫眞めいたごとく、流の畫で壁などを飾る人も有りますがこんな下品なものはありません、今かく畫は大抵皆額で、建築の附屬では有りません、其畫は皆一ツ／＼別々に見る様に爲つて居るのだから畫一枚丈で或る一つの感を起させなければならぬ故に人物の形にしても芝居流の形をなるべくさけて自然に近づく様に爲り色合も光線の取具合も違つて來た、たとへば夏の朝未だ太陽の見へない内に草の上に露の有ると云様な所や又夕方人の形のもうはつきり見へぬ頃にはたけ道を百姓の夫婦が睦じく何か話て行くと云様な所はラファエル時代などの畫にあまり無い趣向です、

(問) 佛蘭西から御歸りになつて、日本の油繪を見て、どう云ふ御感じが起りました、

(答) 私は甘いと思つた、まるで西洋の畫を見たこともないで當てずっぽうにやるにしては甘いと思つた、新派舊派と云ふ事に付て已にお話致しましたが、あの舊派の書き方の方法に依つて行けば一寸手際の宜いものが出る、さう云ふものを見たのですから大變甘いと思つた、其代り一枚見れば十枚見るも同じことで變化がない、段々目に慣れて見ると左程上手でない、チヨイト一枚位見た時は甘いと思ふ、兎角に世間見ずでこの位迄にやり付けたのは感心です、(未完)

『太陽』三十七明治三〇年四月五日